

## 初代センター長時代を振り返り、 今後のセンター活動に期待すること

初代ストップ温暖化センターみやぎセンター長  
MELON名誉理事  
北條 祥子



### はじめに

「ストップ温暖化センターみやぎ」設置20周年、本当におめでとうございます。初代センター長をさせていただいた私にとって、センターが20周年を迎えたことに対し、大変、感慨深い思いがあります。今、振り返りますと、初代センター長ということで張り切り過ぎ、赤面するような行動ばかりしてきた気がしますが、僭越ながら、当時を振り返り、今後のセンター活動に期待することを述べたいと思います。

### 初代センター長を引き受けた経緯

宮城県地球温暖化防止活動推進センター（ストップ温暖化センターみやぎ）は、北海道、広島、兵庫に次いで、全国で第4番目に設立されたセンターです。宮城のセンターの大きな特徴は、他県が県の外郭団体だったのに対し、環境NGO（みやぎ環境とくらしネットワーク、MELON）が推進母体のセンターだという点でした。

当時、私は、尚綱女学院短期大学人間関係学科教授として、校務（週8コマの講義、クラス担任他）の他に、研究面では厚生省・シックハウス病態解明検討委員、日本建築学会・シックハウス対策検討委員、および、環境省・小児の行動パターン検討ワーキンググループのメンバーとして、社会活動面では各種審議会委員（例；環境省農薬環境懇談会、宮城県総合審議会、仙台市環境審議会など）を兼務しており、物理的・精神的に余裕のない生活をしておりました。

そこで、センター長就任をしゅびっている私に対し、「NGOが主体の温暖化防止活動センターの役割は大きい。全面的に協力するので、是非、引き受けて下さい！」と、強く私の背中を押してくれたが、当時、私の環境ボランティア活動を手伝ってくれていた主婦の田中美恵子さんでした。「県から何の資金援助もなく、行政にうまく利用されるだけでは？」と心配する声もありましたが、私は、「市民の声で行政を変えていけるようなセンターにしたい」と前向きに考えて、センター長を引き受けることにした次第です。

### 「設立シンポジウム」を開催して船出

設立シンポジウムには、高月紘・京都大学教授（環境漫画家・ハイムーン先生）、和田武・立命館大学教授（自然エネルギー問題専門）田中正之・東北大学教授（温暖化メカニズム解析専門）、呉地正行・日本鷹を保護する会会長（鳥類への温暖化影響専門）の4人のシンポジストをお願いしました。各先生方のご専門の立場から、「市民参加型の温暖化防止活動の重要性」についてご講演いただき、会場の参加者（約100名）と、熱気にあふれた活発な質疑応答をしました。当日は、浅野史郎県知事も挨拶にかけつけて下さり、大盛会の内に、設立シンポジウムを開催し、センターは船出しました。（河北新報、2000年9月17日記事右図参照）。



設立シンポジウムにて挨拶をする北條氏



## 初代センターの具体的活動

初代センターでは、以下のような活動を行いました。1) 国内外の温暖化防止活動団体との交流・情報交換)。全国温暖化防止センター会議には、毎年、必ず参加しました。また、第6回国連気候変動枠組み条約締約国会議世界温暖化防止会議(COP6、西ドイツのボンで開催)に、北條と伊藤卓雄さん(民間から公募)が参加。そして「COP6緊急報告会(P.5参照)」を開催し、県民に世界の最新情報を報告しました。2) 県の委託事業では、①温暖化防止活動推進員養成、②環境教材「みやぎエコカレンダー(P.5参照)」と「環境家計簿CD-ROM」の作成。③温暖化防止の啓蒙活動(例:推進員と共に県内各地で上記教材の普及)。3) 大学や地域の環境活動家の協力を得ながら、省エネ推進に関するセンター独自の基礎的調査を行い、その結果をわかりやすくまとめて、「市民がつくるみやぎ環境白書(P.5参照)」を発行しました。白書では、市民が地域で行っている様々な環境活動内容も執筆していただきました。「市民版環境白書」発行は、5年間継続されました。

以上のような、センターの活動は、市民参加型で地域密着型の温暖防止活動として、当時は全国的に珍しく、高い評価をいただきました。上記のことができたのは、事務局長の斎藤昭子氏、田中美恵子氏、門田陽子氏、伊藤卓雄氏、篠原富雄氏、山田一裕先生、石垣政裕先生、西崎友一郎先生など、現在も活動を継続しておられる多くの方々が無償的に活動して下さったおかげです。

この場をお借りして、改めて、深く感謝致します。

## 体調をくずし、センター長を交代

私は、東北大学医学部薬学科(現薬学部)を卒業後、東北大学歯学部(25年間)、尚絅女学院短期大学/尚絅学院大学(18年間)、早稲田大学応用脳科学研究所(10年間)と、約50年間、“環境と健康”に関する研究教育に従事してきた研究者です。当時は2人の子供も達は家庭を持ち、主人は東北大学薬学部から昭和薬科大学副学長として単身赴任をしておりましたので、校務の他に、研究や社会活動ができる立場でした。毎日、午前様のハードな日々で、体調をくずし、センター長を辞める羽目になってしまいました。

後任の長谷川公一先生は、私のように早急に事を進めるのではなく、有能な事務局や運営委員に任すところは任せ、環境省や宮城県環境政策課とも密接な連携を取りながら、長期展望を示しながら、“ストップ温暖化センターみやぎ”を全国センターの中心的存在にまで発展させて下さり、感謝の言葉しかありません。

## Withコロナ下で今後のセンター活動に期待すること；Think Future, Act Now!

私の専門は環境過敏症(シックハウス症候群/化学物質過敏症/電磁過敏症)の病態解明の研究です。環境過敏症とは通常では感じないレベルの化学的要因(受動喫煙・農薬・殺虫剤・芳香剤・柔軟剤等)、物理的要因(音、光、電磁場(スマホ・ゲーム機・携帯基地局・パソコン・テレビ等)、生物的要因(カビ・ダニ等)により自律神経系障害を中心とする多臓器の多彩な症状が発現する健康障害の総称です。

アレルギー疾患と密接な関係があり、今、世界各地で患者の急増が報告されております。子供の環境過敏症患者は行動障害や学習障害合併が多いとの報告もあります。そこで、今、私が、一番危惧していることは、地球温暖化等の環境悪化が次世代の子供の健康、特に脳神経系の発達段階に及ぼす悪影響です。

私は、新型コロナのような新興感染症も環境過敏症も人類が経済最優先の便利で豊かな生活を享受してきたことに起因するため、現代人なら誰がいつ発症してもおかしくない健康障害だと考えます。すなわち、私達現代人は、被害者であると同時に加害者でもあります。したがって、問題解決のためには、私達自身が、当事者意識を持ち、次世代の子供が健康で暮らせる持続可能な社会に転換するための具体的な取り組みを、試行錯誤しながらでも、一刻も早く、開始すべき時期にきていると考えます。

そして、こんなWithコロナ時代だからこそ、20年間、市民参加で地域に密着した地道な活動を継続してきた「ストップ温暖化センターみやぎ」の果たす役割は大きいと思います。センターのますますの発展をお祈りします。

私も、微力ですが、“約50年間、環境と健康の関わりを研究してきた4人の孫を持つ76歳のおばあちゃん研究者だからこそできるご協力をさせていただきたいと思います。